

現生正定聚の研究

藤岡隆章

『仏説無量壽經』の第十一願文に「設我得_レ仏、國中_レ人天、不_レ住_二正聚_一、必至_二滅度_一者、不_レ取_二正覺_一」と説かれること、原意において正定聚は来世の浄土において得る位であるのに対し、親鸞は『浄土三經往生文類』の「大經往生」において「念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらゐに住して、かならず真実報土にいたる」と述べられるように現生で正定聚を語られる。さらに諸經・論により正定聚の意味は異なるのであるが、『一念多念文意』には正定聚の語の左訓に「カナラズホトケニナルベキミトナレルトナリ」と示されて仏になることが間違いないと正しく定められた人々と意義づけられている（『一多文意』にはその他、往生できる身に定まるとも言われている）。この親鸞の已証を理解するために先学の考察を参考にして、法然と親鸞が往生の業因（正定業）として説かれる念仏（名号）と、親鸞が正定聚を語る場合の多くに摂取不捨の言葉を使われていることに注目していきたい。

法然上人は醍醐本『法然上人伝記』に念仏について「於_二平生念仏_一、往生不定_レ思、臨終_レ念仏又以不定也。以_二平生念仏_一決定_レ思、臨終又以決定也云々」と言われ、念仏をする衆生は平生の時に浄土へ往生することが定まると説かれる。この理由は善導の『觀經四帖疏』に説かれる六字釈に基づくものであつて、南無阿弥陀仏に願と行が具足している故に称名に往生する為の要因があると言われるのである。従つて必然的に弥陀の本願は称名した者を往生させると誓われている願であるはずであり、『選択集』に「称名念仏是彼_レ仏本願行也。故修_レ之者、乘_二彼仏願_一、必得_二往生_一」と述べられる。このように念仏する者は名号の力により必ず往生できるのであり、その必ずと言うことを摂取不捨として説くのである。摂取不捨とは摂め取つて捨てないと言うことであつて、これは弥陀因位の法蔵菩薩の時に立てた四十八願の一々に言われる「若_レ不生者、不取正覺」の誓いが、阿弥陀仏と成つて成就したものである。即ち摂取不捨とは弥陀の救いの中にあるので浄土に必

ず生まれることを表すものである。『観無量寿經』の真身觀においてはこれを弥陀の光明の働きとして説くのであり、『西方指南抄』にこの文を引用して「一一の光明、十方世界の念仏の衆生をてらし、攝取して捨てたまはず」と言う。よつて念仏衆生は攝取不捨の利益にあずかるがゆえに、『指南抄』には「南無阿弥陀仏と唱てむ上には、決定往生とおもひをなすべきなり」の文がある。また正定聚を現当のどちらで語っているかを伺うと、『選択集』の二門章において『往生論註』の文「但以信レ仏因縁、願生淨土、乘レ仏願力、便得往生彼清淨土、仏力住持、即入大乘正定之聚」（訓点は往生院本を参考）を引用していることより往生以後に入る位であることは明白である。ただ、『漢語灯録』に「若人聞此阿弥陀名、皆蒙護念、得不退轉菩提之益也……中略……已上二者是現益也」と言っている。しかしこの文は往生すれば自然に正定聚に入り成仏することができるので現生に往生が定まった時に菩提を得る位から退かないと言う意であつて、これを正定聚とは説かれなかったのである。

法然を師と仰いだ親鸞は『教行証文類』の信巻に「大願清淨報土、不云品位階次、一念須臾頃、速疾超証無上正真道。故曰横超也」と言い、往生即成仏を説かれる。この親鸞の主張は、二雙四重判に示されるように即身成仏を説く天台宗や真言宗（豎超）に対し、或は往生即成仏を説かな

い法然門下に対して浄土教は仏教本来の目的の証悟教であり成仏教であつて、しかも善導や法然は頓教であると言われてることより早く仏になる教えとして浄土真宗（横超）を示したと考えられる。特に速やかに仏に成ると言うことは、天台宗や真言宗に対してと思えるのである。これらの宗派は即身成仏を主張し早く仏に成ると言う。これに対し親鸞は横超において即得往生（来世の往生即成仏が定まる）を語られ、『一多文意』には即時や日を隔てないことであるとし、即の字をもつて超の字の意義を示し、豎超の宗派に劣らないことを示したのであらう。また親鸞の在世時代を見ると、飢饉や戦争が多発している。その世で生きた人々が仏に成ることに注目したのは当然である。従つて親鸞の求道の目的は出難生死ということであつて、『唯信鈔文意』の文「横はよこさまといふ、超はこえてといふ、よろづの法にすぐれて、すみやかにとく生死の大海をこえて無上覺にいたるゆへに超とまうすなり」より、他力回向によりて衆生が仏に成ることに對して目的は達成されたのであつた。従つて弥陀の願は『歎異抄』の第三章に説かれるように悪人成仏の爲の願である。故に行巻に後善導と言われる法照の『五会法事讚』の「念仏成仏是真宗」や『往生要集』の「一称南無仏皆已成仏道」の文、さらには『尊号真像銘文』に「わが浄土宗は弥陀の本願の実報土の正因として十声称念すれば無上菩提にいたるとお

しへたまふ」と言う文を載せているように、親鸞において浄土の祖師の教えは称名により成仏できるということであった。勿論称名が成仏の因であるには名号が成仏の因であるはずである。『唯信鈔文意』に「この如来の尊号は不可称不可説不可思議にましますゆへに、一切衆生をして無上大涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひのみななり」と示されるごとくである。よって名号の功德により仏に成ることは間違いないのである。しかし何故名号を戴いた時に成仏できないのであろうか。これについて『一多文意』に「無明煩惱われらがみにみちみちて、…(中略)…臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず」と説かれ、煩惱具足の身であるからと言う。よって仏性は来世において顯れるのであって、現生に名号を戴いた時は正定聚の位に入る。ここに前述の『漢語灯録』に説かれた不退転と通仏教でとかれる彼土の正定聚とが全く一致したのであるから『一多文意』に「正定聚のくらゐにさだまるを不退転に住すとはのたまへるなり」と示されるのである。真宗においては名号を戴いた時を信の一念と言ひ、この時に衆生は摂取不捨という阿弥陀如来の救いの働きの中に入るのであるから来世の成仏が定まる正定聚に入る。これを『唯信鈔文意』には「誓願真実の信心をえたふひとは、摂取不捨の御ちかひにおさめとりてまもらせたまふによりて、行人のはからひにあらず、金剛の信心となるゆへに正定聚のくらゐに住すといふ」と言っている。このように親鸞においては、法然が本願を念仏往生の願と言われたことを受け継ぎ、即身成仏の思想や乱世の中にあつて仏に成ることが真宗の立場であり法然の真意であるとして、法然の往生は往生即成仏であると示し、現生においては聞名の時に摂取不捨の利益により正定聚の位に入り、弥陀救済の現生性と万民救済の超勝性を明確にした。『一多文意』の「釈迦如来五濁のわれらがためにときたまへる文のころは、それ衆生あて、かのくににむまれむとするものは、みなことごとく正定の聚に住す」と言う文より、親鸞はこの世に出現された釈尊が現生正定聚を説かれたと示されるのである。かのくににむまれむとするものは『大経』の異訳である『無量寿如来会』の第十一願成就文によつたのであり、さらに信心を戴けば正定聚にいたので、行巻に引用される「易行品」の、敬いの心をもつて念仏すれば此身において阿惟越致地(不退転)を得るという文などによると、親鸞において現生正定聚を語ることは浄土教の伝統であると理解していたのである。

△キーワード▽ 正定聚、名号、往生

(龍谷大学大学院)